

父の足跡をたどって

高林 勢津子

今から四十年前、私の父塩見茂(当時七十二才)は腎炎を患ったことがあつた(たなかやす)の長女)が高校受験をするといつたので、励ましの手紙を書き始めました。その手紙がいつの間にか自分の生きてきた道をふり返るものとなり、たくさんの手紙を書き残してくれました。姉のたなかやす)が語る「二度戦争にいった父と私の物語」はその手紙を元にしたものです。

この度、姉が父の兵籍簿をとりよせたことによつて、父の二度の応召の様子がさらにくわしくわかりました。また地図でその足跡をたどると、一兵卒として従軍した父の姿が私の前に立ちあがってきました。あらためて二度戦争に行った父を、父の手紙を元にふり返りたいと思います。

はじめの召集

昭和七年二月、父は二十五才、独身でした。高槻工兵隊に入隊。五百住村の民家に分宿し、受けとつた軍服は、日の目があるのを用意していたように大正三年のもので、缶詰も大正時代のもので、外装は明治四十三年と印してあるのにおどろいたようです。戦争の準備が着々とされていたのです。夜の八時に高槻を出発。沿道のバンザイバンザイの声に送られ、ラッパを先頭に重い背囊(十五貫、五十六キロ、強)を背負つて、夜通し天六(天神橋六丁目)までへとへとなつて歩きました。

二月六日、大阪港から出港、十一日に上海に上陸。そして上海で

何をしたかというところ、上海紡績工場の社宅の警備でした。当時、日本の財閥は中・国大陸・満州へどんどん進出していたので、日本人が住んでいるところの警備でした。兵舎には寝台もななく、むしろの上に毛布をしいて寝ました。

父は、二十五才でまだ体力があつたとは思いますが、どこへ行くとも知らされず、結構な暮らしをしていた在留邦人を守るために召集されたのです。一回目の応召は四月で日本に帰ってきました。

生前、父は上海だけはもう一度見たいと言っていました。上海郊外は、テロや八路軍がよく出て危険でしたが、戦闘にはあわず、



昭和19年父34才(武漢にて)

揚子江の川べりの租界地にたつハイカラな西洋建築の建物が目にあきついていたのでしよう。でもなぜ赤紙一枚で召集され、裕福な暮らしをする人たちを守るために行かされたのかずうずうつと理不尽に思っていました。

二度めの召集

昭和十三年九月、父は三十一才、姉やす)が一才半のとき、広島・宇品港から出港。目的地はどこなのか、いつ着くのかも知らされてはいません。船の中は三メートルくらいの高さを板で上下に分けてあり、上に寝る者は梯子を伝つて上へ、下に寝る者は頭を低くして入り、板の上にはゴザが一枚敷いてあるだけで、背囊などを置くところがないのが精一杯で、監獄部屋以下だったそうです。

水にも困り、大海原の海水が飲める水ならば、どんなに助かるかと思わぬ口はなかつたのです。

日本を離れて一週間、船酔いのため寝たきりになる戦友も出てきました。その後のことは父の手紙を引用します。

「島の湾のようなところでイカリが下ろされ、船は、一時停船しました。甲板の上を歩いていると、四方八方に船のあかりがあり、発火信号が絶えず送られて何十隻の船が集結しています。船員に聞きましたところ『誰にも話をないうたさい、ここは台湾南西の澎湖島です。次の命令を待っているのです』と、ひみつで教えてくれました。私は勤務にしていたからこんなありさまを見るのができたのです。それから三日後でした。夕食に、白い御飯にすき焼きの缶詰それに今まで食べたことのない缶詰を出してくれました。身につくようにおいしかったです。それもこの筈、明朝敵前上陸をするので、みんなに元気をつけるためでした。一合酒も配られて、これが別れの酒かと思うとなんだかさびしく思われました。朝四時半ごろでした。用を足すために甲板へ上がったみると、海軍の艦砲射撃が御用船(私たちの船)より一歩前に出て、敵地にもかつてごんごんとうちごんごんではいるのです。あ、これが戦地かという気持ちで見ていると、『早く甲板から下へ降りよ』と、叱られました。

でも、私は見ました。大きな船の裏側から次から次へと小さな上陸用舟艇が海上に流れるように出てくるのを、あ、日本にもこんな準備があったのか、よくもこんなに積んでいたもんだなあと驚きました。私等もこの船で上陸するのだと思って叱られながら見ていました。

一番先に歩兵部隊、次に工兵隊、私等電信隊は三番目に降りることになりました。むろんタラップはありません。甲板から縄梯

子で背囊を背負い、銃を持って青々とした海の上へ降りていくのです。舟艇は下で待っていて定員になり次第陸地に向かって出発です。

私等の乗った舟は立ったままで四十分、しかも浅瀬のため砂浜までつけてもらえず、足のふとももがつかる深さへらいから海へ入りました。靴に海水が入り、銃はぬらさぬようにしてとぼとぼと砂地までたどり着きました。思ったより苦しい目にあいました。全員上陸、あのせまくるしい監獄部屋から大地に足を入れた気持ちは筆ではあらわしません。でも敵地、しかもこの作戦は後で知ったのですが、めざす広東にはほど遠い裏側で、中国人はよもやこんな所に日本軍が上陸するとは夢にも思っていなかったことでしょう。山はあっても完全な道はなく、遠浅で船はとも入ってこないと安心していたのです。

元より工兵隊は、全国より集まり各持ち場があつて、我をきまつて道をつけ橋をかけて請け負ひ業のように各部隊は車輪を通すため全力をかけたのです。その間次から次へと歩兵は道なき道を前進するのみで、私等も先発隊の出発した後、電線をかつぎながら山を上り下りして一つの部落に着き、ここではばらく上陸地点と前線の電信勤務につきました。その行く道には人馬の死体がいくつもあり、腐敗臭が遠くよりして顔をそむけざるをえない状態でした。部落といつてもすでに中国人は逃げて空き家ばかり、私等は、土の上にわらを集めて寝床を



作り直した。」

地図で確かめると刺繍で有名な広東省・汕頭(すわとう)に近い白耶土灣上陸地帯だ。中国の人たちは予想もしないところから次から次へと日本軍が上陸してきてこわかったことでしょう。すべてをほろりだして逃げたその空き家に押し入り、食料を奪い、残っていた人々は殺されました。これが侵略するということなんだと改めて思います。

一年二ヶ月いた広東では、ベトナム国境に近い南寧まで作戦と称して行かされています。父は通信兵でしたから重い電線をかっいで運ぶのですが、中国軍も日本軍の進撃を阻むために深い戦車壕を掘り、日本軍が進むと山の上から迫撃砲を撃ってくる非常にきびしく辛い行軍でした。

野戦病院では、両足を貫通した傷で立てない人や、両眼を白い包帯で包まれている人、荷札をつけられ送られていく人たちがたくさんいて、みんな一枚の赤紙のためにこんな運命になってしまったと、父は嘆いていました。

私は思います。大切な人の命がこんなにも軽くあつかわれる戦争って何なんだと憤りをおぼえます。南の方へ行った戦死者の多くが餓死だったということとを大人になってから知り、とてもショックを受けました。

父は昭和十五年十一月、香港の近くの港から大阪港へ、無事帰ってきました。三十三才になっていました。

三度めの召集

昭和十九年、父は三十七才、姉が七才のとき、三度めの召集令状が来ました。「今度は帰ってこられないかもしれん」という父を、姉は相模原までおぼあちゃんと一緒に会いに行っています。

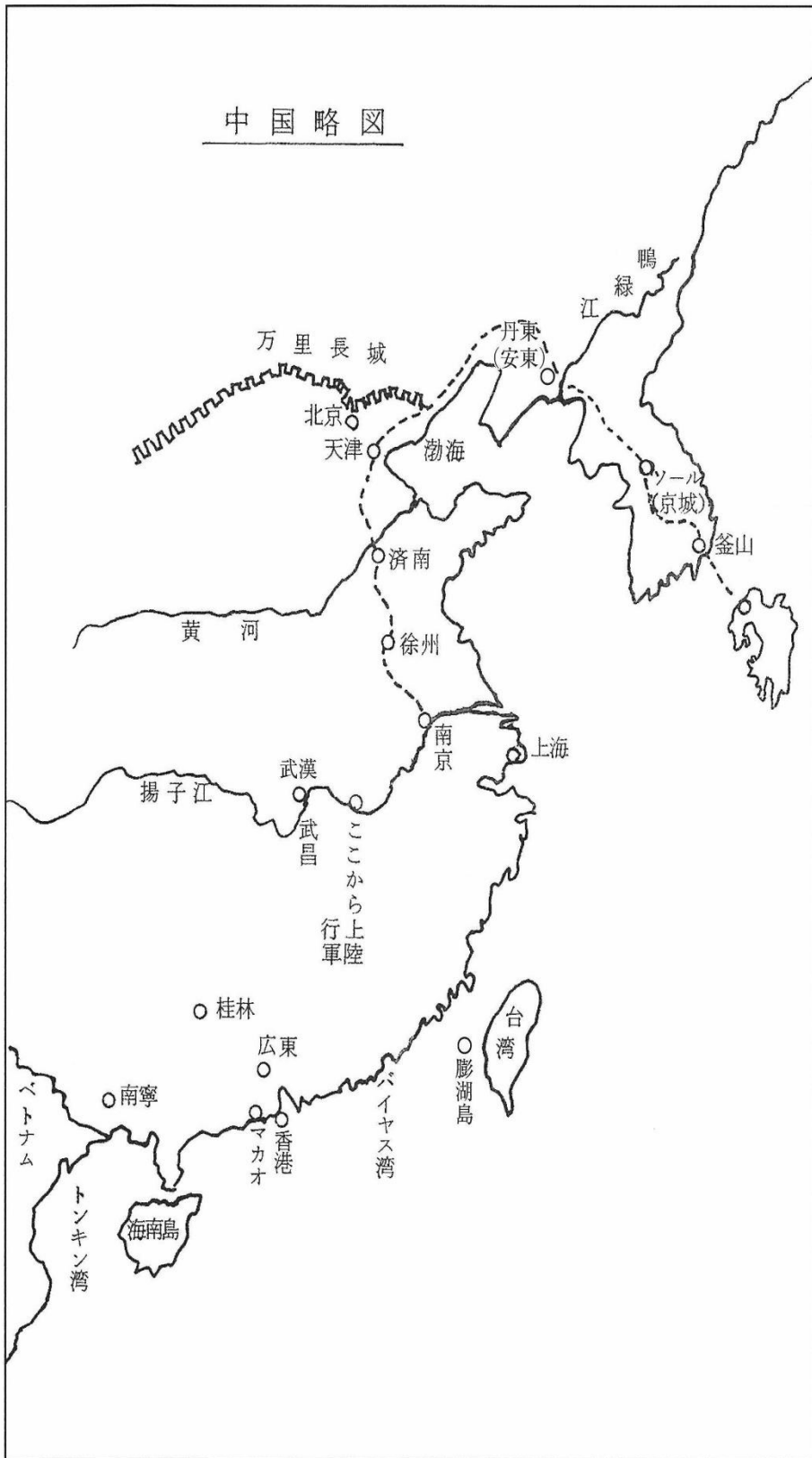
父は、門司、釜山、鴨緑江を渡り安東(丹東)、山海関、徐州、南京へと、南京からは船で武昌(武漢)へ、ところが武昌に上陸できないことがわかり、途中で下船して百キロメートルの道を行軍しました。歩けなかつたら死ぬしかない、荷車の後ろに縄をつけ、自分の身体につないで引きずられるようにして歩いたのが一番辛かったと回想しています。

本場の戦況はわからないなか、夜中に中国軍が二十本ほど電柱を切ってしまったので、その補修に出たり、飛んでくる戦闘機にねらわれたりしました。しかしまさかの敗戦で、中国八路軍の捕虜になりました。

毎日毎日土方のような仕事を命令されてやっていましたがお金は一銭もないので、吊っていた蚊帳の下に黒い純綿の布がついているのに気づくと、黒い部分をはさみで切つて、その布をお腹に巻いて売りに行き、酒と豚(肉)を買って帰った日もあったようです。

「お父さん、やったね」と言っただけなのですが、今回、兵籍簿を見てみると、なんと、二十年十月にマラリヤにかかり武漢の北百キロの孝感という街に隔離されていたことがわかりました。

どんなふうにして運ばれたんだろう、しんどいし心細かっただろうと思います。父はマラリヤのことは一言も言わなかったのでびっくりしましたが、復員してきてすごい熱を出したことが一回あったと姉が言っているのです。やはりマラリヤ熱だったのでしょうか。あるとき八路軍の将校の部屋のそうじが終わり、壁にはってある地図を見ていた父に、「掃除はすみましたが。この地図はあなたには必要ありません。見たこともここにある事も誰にも話してはなりません。戦争は終わって、あなた達は船の便がつき次第、日本に帰れるでしょう。それまで体を大切にしてください」と立派な日本



- 第1回召集 大阪港→上海→大阪港
- 第2回召集 広島→バイヤス湾→広東→南寧→大阪港
- 第3回召集 門司→釜山→丹東→徐州→南京→武漢→上海→鹿児島

語で言われたとき、嬉し涙で一杯になりました。
 いしも、姉の話が「こまへん」と、私も涙が出ます。やっと生きて日本に帰れるとわかった瞬間ですから、父がどんなに嬉しかったことが、私も父が言ったように「感謝(ありが)と」といってなります。

昭和二十一年六月、上海から鹿児島へ無事帰ってきました。桜島の煙を見たとき、本当に日本へ帰ってきたんや、生きて帰ってこれたうれしかったと言っていました。父は三十九才になっていました。

